

# 医療ルネサンス

No6647



# がん治療と妊娠

5/6

## 里親や養子縁組も選択肢

「ママ、抱っこして」  
静岡県熱海市の公務員・河村裕美さん(50)は、愛らしい笑顔で胸に飛び込んできた長女のB子ちゃん(2)をギュッと抱きしめた。あ

ら電話がかかってきた。がん治療が落ち着いた10年近く前、里親になりたいと児相に申請をしていたことを思い出した。

その子の母親は病気で、育てられないため親権を放棄したいという。父親の所在は不明のことだった。

その翌週、夫とともに児童養護施設を訪ねた。生後4か月の女の子は、すやすやと眠っていた。河村さんは「顔がなぜか夫に似ている気がした。運命だと思っ

りふれた親子の風景だが、河村さんはB子ちゃんの実の親ではない。親が育てられない乳幼児を実子として育てる「特別養子縁組」を結んだ養親だ。「血のつながりはなくても、親子であることに変わりはありません」と語る。

慣れない子育てに苦戦しながらも、「かわいくて仕方がない」とほほ笑む河村さん。「ただ、安易な気持ちで養親になるべきではない」と表情を引き締める。

特別養子縁組は、実親が育てられない子どもを、親の代わりに社会が守り育てる気がした。運命だと思っ

た。河村さんは「里親や養子縁組は、子どもの福祉のための制度であることを理解した上で、こうした選択肢があることを知ってほしい」と話している。

河村さんは1999年、子宮頸がんと診断された。結婚の1週間後。夫と「赤ちゃんがほしいね」と将来の夢を語り合っていた頃だった。すぐに子宮を摘出する手術を受けた。夫に離婚を切り出すと「2人で生きよう」と支えてくれた。

「ゼロ歳の女の子がいる。養親になりませんか」。2015年夏、児童相談所か

る気がした。運命だと思っ

るための仕組みで、子どもがいない人のための制度ではないと考えるからだ。

「ゼロ歳の女の子がいる。養親になりませんか」。2015年夏、児童相談所か

る気がした。運命だと思っ

る気がした。運命だと思っ

る気がした。運命だと思っ



B子ちゃんを抱っこする河村さん。「障害や病気があったとしても、すべてを受け入れるつもり」と話す(静岡県熱海市で)

\*里親と養子縁組の情報を提供する冊子の申し込みはオレンジティのメールアドレス (ot@o-tea.org) まで

独協医科大学越谷病院(埼玉県越谷市)リプロダクションセンター教授の杉本公平さんは、里親や特別養子縁組が、がんで妊娠できなくなった人の選択肢となることを目指す調査研究を続けている。

杉本さんは「卵子の凍結保存など妊娠する能力を残す技術は、誰もが利用できるわけではない。患者の健康状態を考慮した上で、医師側からも、里親などの制度の情報を提供すべきだ」と指摘している。